

第2号議案

令和4年度事業計画書及び収支予算書承認の件

令和4年度事業方針(案)

理事長 中川 法一

令和4年度は日本理学療法士協会による新生涯学習制度元年となり、会員の皆さまにとって、また生涯学習センター（以下、センター）にとっても大きな転機だと考えています。そもそも旧制度は短期間で認定・専門理学療法士が取得できてしまう制度設計が問題であり、わずかな研修期間での資格取得に恩恵を求めること自体が早計であったと考えています。新制度では卒業後5年間に渡り多領域のカリキュラムを履修して“登録理学療法士”が取得できます。一般的な疾病や多様や障害像に対して適切な理学療法を提供できる能力があることを国民に対し協会が担保・証明をしてくれる制度です。より多くの理学療法士が登録理学療法士資格を有することで、自己研鑽を怠る未取得者に不利益が生じる制度だと考えれば、メリットがないという不満は生まれません。いたずらにメリットを求めるのではなく、自らの研鑽によって自らの能力を保証する制度だと考えれば新制度の意義が理解できると思います。登録理学療法士の上位資格として認定・専門理学療法士があるわけですが、当センターとしましては、先ずもって一人でも多くの会員が登録理学療法士資格を取得するための支援ができるよう企画を考えています。

新制度は、基本的に協会と府士会（センター）と各所属施設が協力する設計になっており、そこへ大阪独自の市区町村士会の機能が追加され、より強力なサポート体制となります。未だ馴染みがない制度ゆえに混乱が生じることは予測しておりますが、協会への質問に未だ明確な回答がない状況であることをご理解いただき、会員諸氏からのご理解とご協力を頂戴したいと願っております。後期研修カリキュラムでの症例検討では市区町村士会のご協力は不可欠です、ご負担をお掛けいたしますが宜しくお願いいたします。

令和元年から世界で猛威を奮った新型コロナウイルス感染による事業への影響は甚大でしたが、私たちも決して手をこまねいていたのではなく、研修事業にICTを活用し新しい研修形態のあり方を探索する機会であると前向きに捉えてまいりました。リモート研修の形態は以前から存在していましたが多くの学会では否定的でありeラーニングの導入程度に留まっていました。しかしオンライン研修を実施してみれば会場確保や運営人員の問題や、会場へのアクセスや子育て中でも自由に参加できることオンデマンド配信での研修時間の制約など参加者の利便性が大きくクローズアップされる結果を得ることができ一気のリモート研修の導入が加速しました。オンサイトでの学会や研修会にはオンラインでは得難い成果があり、同じ志をもつ仲間との出会いや議論を交わす好機会ですが、ポストコロナの研修の有り様は令和元年以前に戻ることはないと考えております。センターとして今後の研修事業はハイブリッド開催が軸になるのではと考え、テーマや研修内容等に応じて

オンサイトもしくはオンラインでの開催をと考えて検討しております。また、運営サイドの興味本位ではなく、様々な年代層の会員のニーズにマッチしたテーマでの開催を検討していく方針にしております。未だ検討中の事項が多く決定した明確な未来像をお伝えできる社会情勢にありませんが、今後計画しております研修会等に参加していただき、会員の皆さま方のご意見を拝聴できればと思います。

冒頭にも記しましたが、新生涯学習制度が開始され研修機会の提供がセンターの大きな役割の1つとなります。昨今は民間事業者によるセミナーが多く開催されており、コロナ禍に乗じてその数は増加し、中には品質管理が怪しげなものまで散見されます。臨床経験の浅い会員は理学療法に関する情報リテラシーが低い危惧があり、お金と時間を無駄にするだけでなく進むべき方向性を誤る可能性も否定できません。この様相の一因にセンターが十分な研修機会を提供できていなかったが可能性があると内省をしております。令和3年度は4回（6講演）の研修会を開催いたしました。今年度は倍増計画を着々と進めておりますので、ホームページ及びSNSによる情報入手を積極的に行ってください。

指定規則の改正による臨床実習の実施要項と指導者要件の変更による影響は、新型コロナウイルス感染による臨床実習の停滞により大きく表面化していませんが、現場では様々な混乱が生じています。並行してオンラインを活用した指導者講習会も粛々と開催され、多くの有資格の指導者が生まれています。わずか16時間での研修で十分な学生指導が到底できるとは考えておらず、有資格者へのフォローアップ研修が重要だと考えております。今年度も臨床実習指導者の質の向上を目的とした事例検討やワークショップ形式での研修会の開催にて臨床教育の本質を理解した指導者育成に尽力する所存です。

積年の夢でありました学術誌である総合理学療法学を令和3年度に創刊でき、今年度は第2号の発行を予定しており、既にJ-Stageでは受理した論文を早期公開しております。創刊号の受理掲載論文数は3編でしたが、第2号では倍以上の8編の掲載ができる予定で、定期刊行に向けて順調な滑り出しをしております。他士会からも投稿をいただくほどの興味を持っていただき、大阪からジェネラルな視点での理学療法学を発信するという、当初の目的達成に向け着実に進んでいるという実感を得ております。6月末の発刊を予定しておりますので、是非とも私たちの「総合理学療法学」に目を通していただき、大阪からの理学療法学の息吹を皆さままで共有ください。

最後になりましたが、新型コロナウイルス感染は未だ私たちに通常的生活活動を戻してきてはいません。センターでは「学びを止めない」を合言葉に、研修機会の提供活動を止めず、公的機関としての研修事業のあり方とニューノーマルな時代の研修スタイルを深く探求してまいります。繰り返しになりますが、今後開催いたします第34回大阪府理学療法学会（ハイブリッド開催）、第4回生涯学習研修集会（オンライン開催）、講習会研修会等に奮ってご参加をいただき、会員の皆さま方の示唆に富むご意見を頂戴できれば、センターの運営に活かしたいと考えておりますので、多くの会員のご参集を心よりお待ちしております。